

戒律より見たる根本真理

平 川 彰

戒律は佛教修行者の日常生活を規定する規則であるが、しかし悟りを實現するのを目的として、立案せられた規則である點に特色がある。それ故、戒律の一一の規則を検討することによつて、原始佛教の實現せんとした根本真理を、實踐的な側面から考察することが可能であると思ふ。ここには特にこの問題を「僧伽の組織」と云ふ面から考へてみたい。僧伽は、簡単に言へば原始佛教の目指した理想社會である。現實の社會は、欲望と争ひ、愛欲の渦巻く世界であるから、佛陀と雖もこれを直ちに理想世界に引き上げることは不可能であつた。それ故まづ志を同じくする人々と共に集つて、その集團において理想的な社會秩序を實現せんとしたのである。これが僧伽である。故に僧伽は佛陀の悟りを指導原理として打立てられた人間共同體である。即ち佛教の悟りに達した人々が、集つて社會を形成するとしたら、その社會はどのやうな組織を持つか、或ひはまた佛教の悟りに達する爲には、如何なる日常生活、或ひは對人關係が要求されてゐるか、等の問題が示されてゐる。ここには、かかる僧伽の秩序を媒介として根本真理の實踐的性格を考へてみたい。

先づ始めに僧伽の意味について、一言しておく必要がある。僧伽は廣い意味では、佛教の在家信者をも含めると解釋する人もある

が、少くとも原始佛教においては、そのやうな用例はない。僧伽は佛教の出家者のみの共同體である。原始佛教においては比丘僧伽 *bhikkhusaṅgha* 比丘尼僧伽 *bhikkhuni'saṅgha* の用語が用ひられるのが普通であり、僧伽が明白に出家者の團體であることを示してゐる。かく僧伽は出家者の團體であるが、しかし比丘と比丘尼とが共同して作る團體ではなくして、比丘僧伽と比丘尼僧伽とは各々獨立であつた。相互に交渉を持つ場合には、「八敬法」と云ふ嚴格な手續を必要とした。それはともかくとして、或る地方に四人以上の比丘、或ひは比丘尼が居つて、共同體を形成した場合に、僧伽を形成し、僧伽の規則を適用して、共同體を運営してゆくことが許される。このやうにして組織される僧伽を「現前僧伽」*sammukhika bhikkhavaṣaṇa* と呼ぶ。現前僧伽とは、地域を單位として形成される僧伽である。律藏で云ふ僧伽は多くの場合この僧伽を意味する。

しかし僧伽の成員は常に遊行してゐる。一つの住處に定住しないのがたてまへである。従つて現前僧伽の成員は絶へず交替してゐる。このやうな遊行を可能にする爲に、僧伽の僧園・精舎・精舎の家具等は、比丘であれば何人でも自由にこれを利用することができ規定になつてゐる。先住者が、精舎が満員である等の理由で、新來者の入居を拒絶することは許されない。どこから到着した比丘で

も、その現前僧伽の成員に無條件になり得たのであるが、これは彼等が師主佛陀に對する信仰において同一味であり、頼るべき教法、守るべき戒律が同じであつたからである。即ち教法や戒律、僧伽の規則等は、現前僧伽を超へた存在であつた。同様な意味で、僧園・精舍等の僧伽の財産も、現前僧伽を超へたものと定められてゐた。このやうな問題がある爲に僧伽の意味には、現前僧伽のみでは含みきれない内容が出てくる。この點から現前僧伽を超へた高次の僧伽が區別されるに至つた。これが「四方僧伽」*cattudisasaṅgha*である。これは「已來當來の四方僧」とも呼ばれ、比丘達全體を包括し、未來の比丘達までも含めた意味での、三世一貫永遠の僧伽である。三寶の一つとしての僧伽は、この四方僧伽の理念に立脚して考へられてゐた。部派佛教時代になると、凡夫僧と聖者僧とを區別し、四双八輩の聖者のみの集團を僧伽と見る考へも出てゐるが、原始佛教においてはまだそこまでの思想の分化は見られない。

二

僧伽の意義は以上の如きものであるが、この僧伽をして僧伽たらしめるものは、僧伽の規則であり、その規則が即ち戒律である。しかしこの戒律の意味についても一言しておく必要がある。と云ふのは、戒と律とは一應分けて理解する必要があるからである。即ち戒は *sīla* であり、律は *vinaya* であり、兩者は言葉が異なる。律は外面的な規則を指すのであり、その多くは條文となつてゐる。これに

對して戒は、この規則を守らうとする心内の精神力を云ふのである。即ち律は外面的・客觀的な規範であるが、戒は主體的・內面的な力である。戒は個人個人のものであるから、戒力の強弱・深淺は人によつて同じでない。しかし律は規則であるから、萬人に共通してをり、一般的である。このやうに戒と律とは、主客に對立する兩極を形成するものであるが、しかし同時にこの兩者が密接に結合して、佛教的修行を形成してゐる。この點に佛教的修行の特色がある。他の團體にも種々なる規則があるが、このやうな性格を備へてゐるものはない。例へば國家の法律は國民に共通する規則であるが、しかしその強制力は罰則に基いてゐる。法律は刑罰によつて、國民に守ることを強要する。しかるに律の規則を守らしめる力は、かかる外的強制力ではなくして、佛道修行に發心した個人の主體的な戒力である。従つて戒の性格は、凡ての佛教徒に同じだと云ふわけにはいかない。戒の性格は、發心の機縁となつた教説によつて異つてくる。佛道に發趣した菩薩が、あまねく一切を救はずんばやまざる情熱に動かされるのは、菩薩の戒がそのやうな性格によつて特質付けられてゐるからである。しかし菩薩の戒をかくの如くに特質付けるものは、入信の機縁となつた「大乘の教」である。佛教の中には法門が多い。その中から特定の「教」を選取せしめるものは「信」である。而してこの信に基いて、人を修行に驅りたしめるものは「戒」である。戒が異なるから修行の形式が異なる。従つて自己の内なる「戒」への自覺なくして、佛道修行が成立する餘地はない。従つて原始佛教の戒律を論ずるに當つては、その戒の性格を阿含の「教」によつて見る必要がある。戒律より見た根本真理の性格を考察する上からは、この點に關する研究が甚だ重要である。しか

しこれは別の機會に譲ることとする。

扱、原始佛教において、個人に内在する戒の力が、僧伽と云ふ集團の結合力の根源となつてゐることは、律藏の説明からも明らかである。律の規定によれば、比丘が僧伽から脱退するのは全く自由である。そこには何等の制限も條件もない。比丘たることをやめると宣言するのみで、僧伽からの脱退が成立する。しかしそれ丈に一度かかる宣言を行ったものには、取消しと云ふ方法は存在しない。かかる人が再び比丘になることを望めば、新規の人と同様に具足戒の儀式を行つて、僧伽に入る手續を踏まねばならない。このやうに僧伽から脱退するのは全く自由であつたから、比丘達が僧伽にとどまつてゐるのは、全く彼等の自發的な精神によるわけである。律の規則には嚴格なものが多いが、それが守られるのも自發的な戒の精神力によるのである。故に比丘が誤つて律の規則を破つた場合には、自ら進んで自己の罪を發露し、罰を受けるのが原則である。即ち僧伽の成員は卒先して律を守らうと努力してゐるのであり、誤つて律を破つた場合にも自ら進んで罰を受けずには居られない程の積極的な精神に住してゐたのである。この精神が即ち戒の力である。それ故、僧伽の律の統制力は、個人に内在する戒力に基いてゐたと云ふことができる。即ち戒は個人に内在する主觀的な力であるが、それにも拘らず僧伽と云ふ團體の、秩序維持の根源力となり得るやうな普遍性を備へてゐるのである。これは戒が、戒・定・慧三學の一つとして、佛陀の説いた法の普遍性につながつてゐるからである。このやうな戒の意義の立場に立つて、律藏に示された律の意味、特に僧伽の組織の意義を考へることしたい。

三

律には、大きく分けて二つの面がある。一つは比丘の個人生活を律する規則であり、第二は、比丘の集團である僧伽の運営に關する規則である。第一の比丘の個人生活の規則は條文化されてをり、所謂二百五十戒がそれである。次の僧伽の運営に關する規則は、條文にはなつてゐない。しかしその重要性においては變りがない。寧ろ僧伽の運営の規則に、根本真理の實踐的な性格が、より具體的に示されてゐると思ふ。

佛陀は僧伽の建設に非常な努力を拂ひ、僧伽を三寶の一つとしてその價值を重要視してゐるが、これは僧伽によつて、一般社會では實現できないやうな「理想社會」、即ち最高の人間秩序を實現しようとしたからである。従つて佛陀が僧伽において實現しようとした理想が、ここで問題にさるべきであると思ふ。さて佛陀が僧伽において實現せんとした理想は、一言に云ふならば「平和」である。僧伽を「和合僧」*sammasambhava*と定義するのはその爲である。

しかし一口に平和と云つても、種種な在り方があるから、原始佛教の理想とした平和についても、更に立ち入つて、その特徴を明らかにする必要がある。

僧伽の特徴を、その經濟的な面から見ると、第一に僧伽は生産に従事しない。比丘が農業や工業、或ひは商業等に従事することは、二百五十戒の何れかの條文に抵觸するので不可能である。信者間の仲介の勞をとり、何等かの利益を受けることも禁止されてゐる。供養を得る目的で説法をすることすら許されてゐない。それ故、信者の側から云へば、布施は全くの「奉仕」である。何等の代償をも期待しない無條件の奉仕である。原始佛教教團では、このやうな性格の布施が、最も尊重されたのである。このやうに僧伽は積極的に財

の獲得をしないから、僧伽の生活は毎日の乞食や、信者の布施によつて維持される。財物の獲得については、僧伽は全く受動的である。従つて一般社會と僧伽との間には、物質の爭奪と云ふことは起らない。このことが「和合僧」を形成する第一の條件である。しかしこのやうに經濟的に不利な條件のもとで、僧伽が存續できた點に、僧伽が一般社會からその價値を高く評價されてゐたことを認めねばならない。世俗の世界は欲望の世界であり、財物の爭奪を事としてゐる。しかし尙且つ、爭奪を越えた世襲、爭奪なき世界をあこがれて、そのモデルを佛教の僧伽に認めて、これを支持したのであると考へられるのである。

僧伽が財の獲得について、全く受動的な態度を取つたのは、できる丈他を傷けないで、自己の生存を維持しようとしたからである。生きる爲に他を傷けることをなるべく避けるには、乞食が最も理想的だからである。なほこのやうな不利な條件のもとで、僧伽が存續する爲には、僧伽は他人の供養に應ずる丈の實力を備へてゐなければならぬ。そこに僧伽が「應供僧」(akkhayasagha)と呼ばれる理由がある。即ち僧伽は世間の供養に應じて恥じない丈の内實を備へてゐることが要求されてゐるのである。僧伽は物質の面においては全的に世間に依存するが、しかし他の面ではそれを償つて餘りある恩恵を社會に與へてゐることが、僧伽存續の條件として要求されてゐたのである。即ち僧伽の性格の一つとして、「不斷の精進」の面のあることを認めねばならない。

上述の如く、僧伽は生産に従事しないから、僧伽の經濟生活で重要なことは消費の面である。これを一言に云ふならば、分配の公平と云ふことである。僧伽においては、主なる財産は四方僧伽の共有

財産となつてゐる。僧園・精舍・寢臺・其の他の器具等は、四方僧の財産に入れる規則であり、現前僧伽はこれを管理し、利用することとはできるが、これを處分することは禁ぜられてゐた。而して利用に際しては、利用の公平が規定されてをり、その爲に細かな規則が作られ、更に比丘の私有財産も認められてゐた。それは衣服・坐具・食鉢・漉水囊・針等の日常生活に必要な小數の物質に限られてゐた。此等の私有財については、分配の公平が規定されてをり、特に衣服と食物の分配については細かな規定が立てられてゐる。

なほ僧伽の物質生活において重要なことは、欲望の制禦と云ふことである。即ち、比丘個人としても、また僧伽全體としても、生活に必要なもの以外は所有することを許されない。金・銀・錢・寶物等は所有が禁ぜられてゐた。また必要なものでも餘分に持つことは許されない。衣服なども一揃のみである。食物も貯藏することは許されてゐた。明日を煩ふ勿れといふ意味である。金銀の所有といふことは、未來での使用を目的としてゐるから、未來に束縛されてゐることを示す。常に現在一刹那に住する人には、金錢の所有欲は起らない筈である。従つてかかることを遮する此等の規定は、未來や過去の束縛から脱することを理想とすることを示すものである。その日その日に結末をつけること、換言すれば常に永遠の現在に住せんとする理想が含まれてゐると解してよいものである。

以上、僧伽の物質生活から云ひ得ることは、諍ひのない世界建設の條件として、物質の面においては、欲望の制禦、小欲知足が第一に要求されてゐる。そして重要な財産はなるべく共同所有にし、個人の所有を許すものについては分配の公平と云ふことが、重要であ

ることが示されてゐる。

四

次に僧伽の精神生活について見ると、第一に僧伽においては個人の人格が充分に尊重せられてゐる。しかし同時に僧伽が、常に全體として同一行動をなしうるまでに、各人の精神が高められてゐたことも認められる。

個人の人格の尊重と云ふ點から云ふと、第一に僧伽には階級がない。しかし無階級の僧伽を作る爲には、僧伽は世間と決定的な斷絶を必要とした。佛教で出家をする人は、僧伽に入る時、過去の生れや階級、富や名譽親族等のすべてを捨てることが要求される。これは百川海に入つて、もとの名を失ひ、ただ大海と呼ばれ、同一鹹味となることに比せられる。比丘も過去の經歷の一切を失つて、沙門釋子となり、同一解脱味なる僧伽に没入するのである。比丘がこのやうに過去の一切を捨てることにより、逆に僧伽の内部においては徹底的な平等が成立するのである。しかし僧伽にも秩序を保つ必要があるから、この點は年長者を敬ひ、比丘になつてからの年月の大小によつて、上下の秩序を立ててゐる。

次に注意すべきことは、僧伽の會議の運営である。僧伽の會議は羯磨作法で行はれるが、この會議においては各人は平等の發言權を持つてゐる。僧伽には特殊な權力者、例へば法王とか法主とか云ふ人は居なかつた。會議において各人は平等であると同時に、會議は全員の一致した意見によつて事を決定する仕組になつてゐた。一人の反對者があつても、事を決定することはできない。これは個人の人格を尊重する限り、多數の意見と雖もこれを無視することができないからである。すべての人の意見を尊重するとすれば、實行し得

ることは、全員が一致して決定したことに盡きるといふことになる。尤も原始教團においても「多數決」は行はれてゐた。しかしそれは現今の會議で用ひる多數決とは、形式は同じでも意味は異なる。現今の多數決の方法は、小數者が好むと好まざるとに拘らず、一定の手續を経て多數決にもつてゆくのであるが、原始佛教においては、全員が多數決による決定を希望する場合にのみ、多數決が採用されるのである。蓋し問題によつては多數決を採用する方が、便利である場合があるからである。

このやうに僧伽においては、個人の意見が極度に尊重されるのであるが、しかしこのことは、各人が勝手な意見を述べてよいと云ふ意味ではない。各人が會議全體の決定を左右し得ると云ふことは、各人が全體に密接に結合してゐることを意識せしめるものであり、個人と全體との相互依存、調和を、成員に深く自覺せしめるものである。このやうな自覺なくしては、上記の如き僧伽の運営方法は、實際には實行不可能であらう。その意味で、上記の規定は、僧伽の成員が「常に全體において自己を見る」と云ふか、「全體に即して自己の行動を決定してゆく」と云ふか、ともかく個人と全體との調和が、高度に保たれてゐたことを示すものである。これは單なるこの規定のみによつて實現し得ることではなく、上來述べてきた物質的精神的の諸々の僧伽の規定が、その基礎となつてゐることは云ふまでもない。それと同時に、これは僧伽の成員がすべて無條件に佛陀に歸依し、その信仰が一味であつたことや、並びに戒に基く定と慧とが、その根柢に僧伽の實踐の教理的基礎付けとなつて働いてゐたことを示すものである。

物質の面における、僧伽の財産の公平なる利用と、分配の平等と

云ふことも、利己心の排除と云ふ意味での無我行の實踐につながるものであるが、同時に物質的な面における全體と個人との相互依存と調和を示すものである。かかる物心二面における「全體と個人との相互依存と調和」を基礎付ける教理が何であるかを求めるならば、それは「縁起の教理」であると云ふのが最も近いと思ふ。

更にもう一つ問題になるのは、僧伽における愛情の在り方である。第一に、男女の愛情は僧伽では否定される。これに附隨して性的快樂も禁止されてゐる。これは欲望の制禦につながる問題であり、此丘達の精神の鍛鍊に重要な役割を果すものであるが、しかし男女の愛欲の禁止は、必然的に子孫の否定につながる問題であり、これを徹底すれば人間存在そのものの否定の問題になる。しかし佛陀がそこまで考へてゐたとは思はれない。佛陀は在家信者の在り方としては、夫婦の關係を認めてをり、正常な家庭生活は容認してゐるからである。男女の性の問題は、僧伽が乞食に頼り、生産に従事しないといふ點と類似の問題である。乞食生活は、他に生産に従事する人々の存在を豫想して、立てられた生活法である。僧伽に性欲を禁じたことも、これと同じやうな關係にあると考へてよいと思ふ。ともかく比丘に男女關係を許すと、必然的に妻や子供ができ、僧伽の出世間性は破壊されざるを得ない。世間を超えた理想國土を、僧伽に實現する爲には、欲の世界である世間との徹底的な斷絶が必要であつた。その意味で性欲の禁止は、少くとも僧伽の中では不可缺の條件であつたのである。

しかしこのことは、僧伽に愛情が無かつたことを示すものではない。戒律では生命の尊重が強く主張されてゐる。第一に人を殺すことが禁ぜられてゐた。治る見込みのない病人の安樂死すら禁止され

てをり、墮胎も禁ぜられてゐた。一般の動物でも、故意に殺すことは許されない。草木を傷けることも許されなかつた。このやうに命ある者への愛情が、強く主張せられてゐた。しかし僧伽の愛情は、感情的であるよりも、寧ろ理性的であつた。全體との調和、相手の利益になることが、即ち愛情であると云つた形の愛情であつた。それ故、僧伽において他人の過失を指摘する場合にも、それが時を得てゐるかどうか、相手の爲になるかどうか、全體の平和を亂さないかどうか等を、先づ考へてしかる後に爲せと云ふ言葉が、しばしば説かれてゐる。相互の利益になり、各人の修行を進歩させるが如き愛情が、僧伽で賞讃される愛情であつた。このやうな相互の利益や、全體の平和との關連において生れる愛情は、全體の調和、相互依存の關係に結合した愛情であり、教理的には縁起の理法につながるつてゐると云つてよいものである。

以上簡單であるが、僧伽の物質生活並びに精神生活の特徴を検討してみると、僧伽の平和と云ふことは、物心二面における個人と全體との全き調和であると云ふことができる。そしてかかる相互依存の調和は、阿含の教理の中では、縁起説に最も近いことは明らかである。即ち原始佛教の根本眞理を、律の規則を媒介として追求すれば、縁起説に歸着すると云ふことができる。縁起の教理は阿含經においては、法の立場から理論的な説明がなされてゐる。それと戒律を媒介として把握された理解とでは、形が異なる點もあるが、しかしそこに共通的な性格のあることも否定できないと思ふ。寧ろ僧伽の組織を媒介として把握された縁起は、以上の如き性格を持つと云ふことができると思ふ。

(本稿は文部省科學研究費による研究の一部である。)